

平成29年度
ひらめき☆ときめきサイエンス～ようこそ大学の研究室へ～KAKENHI
(研究成果の社会還元・普及事業)
実施報告書

HT29317 Happy Art Workshop in English II 日本美術を味わおう！～影絵あそび～



開催日：平成29年12月9日(土)

実施機関：大分大学

(実施場所) (巨野原キャンパス)

実施代表者：藤井 康子

(所属・職名) (教育学部・准教授)

受講生：小学生 21名

関連URL：<http://www.oita-u.ac.jp/01oshirase/topics/2017-089.html>

【実施内容】

- 受講生に分かりやすく研究成果を伝えるために、また受講生に自ら活発な活動をさせるためにプログラムを留意、工夫した点

美術教育の観点からは、江戸時代の浮世絵師・歌川国芳(1798～1861)の影絵を取り上げ、子供に「What's this?」「The answer is ～.」という英語表現を使ってシルエットクイズ形式で鑑賞させて、日本美術も英語も分かりやすく楽しく学べるよう工夫した。影絵づくりでは、独自に作成した四方1mのスクリーンを各班(4～5名構成)に用意し、透明素材のプロジェクターの光を通した影の形と色の面白さを味わわせるよう工夫した。

英語教育の観点からは、授業者の英語を話すことへの緊張・不安な気持ちをほぐす工夫として、身体を使ったアイスブレイクのゲームや、曲のリズムに合わせて英語表現を練習する英語の歌の活動を取り入れた。図工と英語の両面において、スタッフで力を合わせて綿密な準備を行ったため、当日の進行を円滑に実施することができた。配付資料は、本活動で学んだ英語表現を、帰宅後の復習の場面でも活用できるよう日本語と英語の両言語で作成した。一日を通して本学教員2名と附属小学校非常勤講師2名(友廣佳奈子氏:図工, エドワード・ケラーマン氏:ALT)、英語の得意な学生4名、立命館アジア太平洋大学(APU)の留学生1名をスタッフとし、受講生の質問や疑問等に答えて各班一人一人の子供をサポートできるよう工夫した。

●当日のスケジュール

9:30-10:00 受付(教育学部棟2階 201号室)

10:00-10:10 開講式(本日のスケジュールの説明、講師紹介、科研費の説明)

10:10-10:40 アイスブレイク、英語の歌の活動

10:40-11:30 講義1「色と形とエイゴ(光・色・形のお話)」、講義2「アートと言葉、日本の美術文化のよさを英語で紹介しよう」 (※途中、10分休憩)

11:30-12:00 「シルエットクイズで歌川国芳の作品鑑賞」

12:00-13:00 昼食・休憩(担当教員および学部学生との座談会)

13:00-13:50 「みんなで影絵をつくろう(グループ制作)」

13:50-14:20 クッキータイム(ケニアの文化や暮らしを知るための国際文化交流)

14:20-15:20 影絵づくりの続き、物語の英訳 (※途中、10分休憩)

15:20-15:40 シルエットショー(影絵の発表会)

15:40-16:00 講師からの講評、修了式(アンケート記入、未来博士号授与)

16:00 終了・解散

●実施の様子

9時20分頃より教育学部2階の201号室に設置した受付には、早くから多くの受講生と保護者が集まった。開講式では、スタッフ紹介の後に実施代表者から科研費の簡単な説明を行い、一日のスケジュール(Today's menu)の確認を行った。班活動が多いことから、初めて顔を合わせた受講生間の緊張をほぐすために、アイスブレイクのゲームと英語の歌の活動を行った。その後、スライドを用いた御手洗靖教授による「色と形とエイゴ」の講義、実施代表者による「アートと言葉」の講義を行い、英語を使ったシルエットクイズによる美術鑑賞を行った。美術の専門用語や難しい英語表現はあまり使用しないよう心がけた。虹の色や幾何学的な形に関する“Why?”を英語と日本語の違いから考える言葉の面白さ、日本美術の作品鑑賞の面白さ等、講師達からの講義が始まると子ども達は少しずつ緊張がほぐれて、少しずつ笑顔と発する言葉の数が増えていった。

プログラム後半の演習では、各班で協力し合いながら影絵のテーマとストーリーを4コマ漫画形式で考えさせた。最後に、シルエットショーによる影絵発表会を行った。子供達は、講師が用意した英語のリストを見ながら日本語で作成したストーリーの英訳にも挑戦し、両言語によるナレーションを発表会で披露した。影絵の美しさとともに、小学生とは思えない高度な英語表現に挑戦する子供の姿が印象的であった。

演習の途中に設けたクッキータイムでは、留学生の故国ケニアの文化や暮らし等について国際交流を行った。受講生は使える又は知っている英語表現を駆使して留学生の家族のこと、食文化の違い、日本の好きなところ等に関する質問を行っていた。短時間ではあったが、文化的な理解が深まる様子を見ることが出来た。

受講生に行ったアンケートの記述には「英語や美術を楽しみながら学ぶことが出来て、研究にとっても興味を持ちました。」「英語で影絵を説明するのは難しかったけど、とても楽しかった。グループのみんなで協力していろいろできたので、また参加したい。」等の感想がみられた。人前で英語を使うことや自分の思いや考えを表現することに課題が見られた子供が自ら積極的に発言するようになる等、成長の姿を捉えることができた。多様な表現手段を駆使して他者と交流したことで、国際交流に必要な経験・スキルとは何かについて考えさせることに繋がったと思う。閉講式では活動のまとめと全体講評を行い、受講生全員に未来博士号を授与した。



写真1 アイスブレイクの様子



写真2 講師による講義の様子

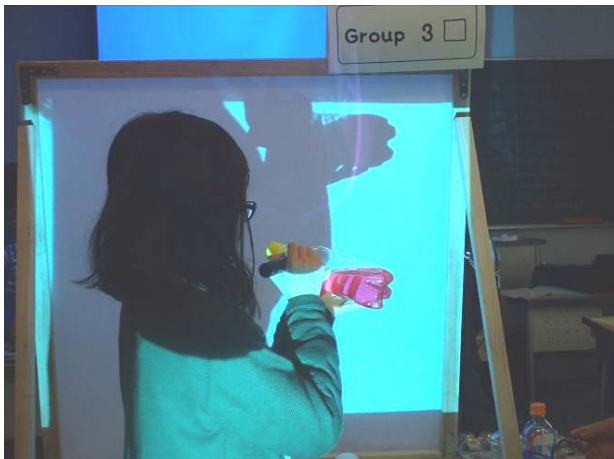


写真3 影の形からイメージをひろげる場面



写真4 影絵を演じる発表会の場面

●事務局との協力体制

日本学術振興会との連絡調整、委託費の管理、提出書類の確認、メディアへの情報告知、受講生への連絡、当日の進行、アンケートの回収・分析等を事務局が担当していただいたため、実施代表者は講義内容や演習のための材料・用具の準備、資料作成、教材研究に集中することができた。

●広報活動

本プログラムのチラシを作成し、事務局を通して大分市の全小学校に送付した。また、近隣の社会教育施設や英語教室、イベント会場等にもチラシを配布した他、本学のホームページ上で宣伝活動を行った。

●安全配慮

当日は、受講生 21 名に対して教員 4 名と簡単な英会話ができる学部生 4 名、留学生 1 名がスタッフとして子供に付き添い、英語を使用する場面や制作の場面で活動の支援を行った。プロジェクターとパソコン機材、スクリーンといった取り扱いに注意が必要な物品があったため、受講生の操作時には細心の注意を払うように見守り、受講生の危険や物品の損傷が無いように配慮した。万一の場合に備え、参加者全員に対して傷害保険を契約した。

●今後の発展性、課題

開催時期については、小学生や教員が比較的余裕のある時期であったためか、20 名の定員があつという間に埋まった(前回の反省をもとに、当日にキャンセルが出ることを想定し、定員より 1 名多く受け入れた)。スタッフの人数と受講生の人数のバランスが良く、図工・英語への関心・意欲が高い子供一人一人に対してきめ細やかな指導・支援を行うことができた。

プログラムの内容に関しては、前回の反省を生かして英語の使用場面が多く設定した。このことが子供の動機づけを高めることに繋がり、最後まで子供の集中力が途切れることがなかったため成功であったと評価している。又小学校の外国語活動の授業のようにプログラムを考案し、小学校高学年の子供が使いやすく理解しやすい英語表現を選択し導入した。影絵制作の過程でも英語表現を多く取り入れ、英語を使用しなければ次に進まないという場面を幾つも設定した。その結果、多くの受講生が様々な英語表現に親しむことが出来ていたように思う。

また、今回は、附属小学校の図画工作科と ALT の教師達と共同で活動内容を構想し、教材の開発を行った。子供が一人で考える活動だけでなく、グループのメンバーと協力して取り組む活動を楽しむことができるように工夫した。自分の思いや考えを相手に伝える表現力・発信力に課題が見られた子供が自ら主体的に学ぶ姿がみられ、このプログラムを経験することを通して子供の成長の過程をみる事ができた。

今回は二回目の挑戦であったが、受講生のアンケート記述の内容から「分からない英語もあつたけど、最後は分かったからよかった。楽しかった。」「楽しく英語を学べて、協力して工作が出来たととても良かった。」という内容がみられ、美術教育と英語教育との融合的な学習に対し子供の「学びに向かう意欲」を高めることができたと考えている。

最後に、本プログラムは分担者、協力者及び大学事務局による万全の支援体制のお陰で開催することができた。心より感謝申し上げたい。

【実施分担者】 御手洗 靖 教育学部・教授

【実施協力者】 7 名

【事務担当者】 後藤 史彦 研究・社会連携部 研究・社会連携課 一般職員